

判断のモダリティ表現について

- 「と見える」を中心に -

チョン・ミリョン

(同徳女子大学博士課程)

1. はじめに

日本語の判断を表すモダリティ表現には「ようだ」「そうだ」「らしい」「だろう」「かもしれない」「にちがいない」などがある。さらに、先行研究では「と見える」「と見られる」「とおもう」などもモダリティ表現の一種であるとしている。

本発表では、次の(1)~(3)に見るような「と見える」を取り上げ、そのモダリティ表現としての意味について考察する。

- (1) 「あの犬は午さがりには元気にいた。すると殺されてほどもないと見える。」

(国盗り物語)

- (2) 二年目の夏に彼は国から催促を受けて漸く帰りました。帰っても専門の事は何にも云わなかったものと見えます。

(こころ)

- (3) さっきより風がだいぶ強くなったと見える。それはあちこちの森から絶えず音を引きもいでいた。

(風立ちぬ)

2. 先行研究

山岡(2003)では、「と見える」「と言える」の形では、認知様態を表すモダリティ付加辞「だろう、そうだ、ようだ、らしい」などに相当する程度に、実質の意味をほとんど失う。」とし、次の例をあげて、説明を加えている。

- (11) 彼女は騒ぎを聞いて慌てて駆けつけたと見える。 山岡(2003)

「「と見える」の形で補文を取るようになると、述語のモーダル化は一層進み「見る」の実質の意味はほとんど残らず、ダロウ、ヨウダ、カモシレナイ、ニチガイナイなど、認知様態を表すモダリティ付加辞に近い働きをする。(25 p)」

このように山岡(2003)では、「と見える」をモダリティを表す形式(付加辞)に相当すると述べているが、詳しい意味・機能などについては詳述していない。山岡(2003)の他に、砂川(1987)、仁田(1991)、日本語記述文法研究会編(2003)のような先行研究でも、「と見える」構文をモダリティ形式として挙げているのにとどまり、「と見える」を判断のモダリティ

として詳細に分析した研究は見当たらない。

3. 「と見える」構文の意味

(4)のような「と見える」を述語とする構文は、伝達内容(命題内容)が話し手の視覚によって得られた情報を根拠に判断したものであることを表す。

- (4) アッという間にペロッと平らげたアヤキ、やっと人心地がついたらしくニッとわらった。どうやら朝食ヌキで稽古に励んでいたと見える。(毎日新聞 2000/5/3)

つまり、(4)は、話し手が視覚によって得られた情報、＜「アヤキ」の行動(アッという間にペロッと平らげたこと)＞を根拠にして、＜どうやら朝飯ヌキで稽古に励んでいた＞と判断していることを表す。(5)にも同様なことが言えるであろう。

- (5) 殴られた男を左右から扶け起し、捨台詞一つ残さずにこそこそと立去った。何時かこの事が孔子の耳に入ったものと見える。子路が呼ばれて師の前に出て行った時、直接には触れないながら、次のようなことを聞かされねばならなかった。(弟子)

「と見える」は「ようだ」「らしい」などと意味的に類似しており、次の例文(6)に見るように、3形式は置き換えが可能である¹。

- (6) どうやら朝食ヌキで稽古に励んでいた{と見える／ようだ／らしい}。

ただし、この3形式は、主観性の度合いに差があり、主観性のもっとも強く感じられるのは「と見える」であると考えられる。これは、もっぱら話し手の視覚によって得られた情報のみを根拠にした話し手の判断を表すという「と見える」の働きに起因するものであると考えられる。

4. 「と見える」と「と見られる」「模様だ」の比較

話し手の視覚情報に基づいた判断を表す形式には、「と見える」の他にも、「と見られる」と「模様だ」がある。「と見られる」と「模様だ」は、それぞれ報道文テキスト、公的報告の立場において、主に使われるが、「と見える」はいずれの場合にもあまり用いられないという違いがある。

4.1 「と見える」と「と見られる」

志波(2013)では、判断型の「と見られる」構文の意味について「何らかの動作主による主

¹「ようだ」と「らしい」の類似性に関しては、寺村(1984)、三宅(1994)、菊地(2000)を参照されたい。

語に対する**判断**を表す」とし、「特に、ラレテイル形であると、判断の主体＝動作主(経験者)には話し手が含まれないと解釈される」としている。さらに「推定型は、判断型の中で、判断の主体に話し手が含まれ、当該の判断を下す根拠が存在するタイプである」としている。

- (7) これまではむしろ、野党がボイコットして定数に達しないままの国会でも開会を認める判断を下すだろう {とみられていた／*と見えていた}。

(朝日 2006/5/9、志波(2013)の(8)の例、「*と見える」は発表者による。)

- (8) 那覇署の調べでは、トラクターが深みにはまり、脱出しようとしたところ前輪が空転し、トラクターが裏返しになった {とみられる／?と見える}。

(朝日 2006/5/7、志波(2013)の(15)の例、「?と見える」は発表者による。)

(7)と(8)は、判断の主体に話者が含まれないか、判断の主体が曖昧な場合の「と見られる」構文の例である。「と見られる」構文は、志波の指摘の通り、(7)、(8)のように報道文テキスト²で多く用いられるが、このような文において「と見える」に置き換えられない。「と見える」構文は、常に判断の主体が話し手であるからである。つまり、話し手の個人的判断が許されない、事実を客観的に伝える報道文テキストにおいて、話し手の判断であることを表す「と見える」は適切ではなく、「と見られる」が使われるのである。

実際、2000 年 01 月～2000 年 12 月の毎日新聞の報道文を対象に調べた結果、「と見える」が用いられた例は見当たらず、コラムに 6 例しかなかった。やはり、報道文テキストでは判断の「と見える」は使われにくいようである。一方、新潮 100 冊や KOTONOHA 少納言などの文学資料のデータベースを調べると、「と見える」構文の用例が地の文・会話文で多数見られる。もっぱら話者の判断を表すという特性から、「と見える」構文は、報道文テキストのような個人の判断を介しない文には使われないと考えられる。

4.2 「と見える」と「模様だ」

佐藤 (2004) で「模様」の報告用法について下記のように述べている。

「犯人はすでに逃走した模様だ」のように、文末に位置して話者が何らかの報告を述べるものが見受けられる。…このような文を「「模様」の報告用法」と呼ぶ。この「模様」の報告用法は発話状況の観点からは〈公的報告の立場〉、発話態度の観点からは〈状況の見た目の描写〉という特徴を有する。さらにこの〈状況の見た目の描写〉という特徴の帰結として、〈認識の非表明〉と〈真偽の不確実〉という特徴を有することになる。また、文末が無標の確言の文やヨウダ等の概言形の文がいずれも機能しない状況において、このタイプの文が体系の隙間を埋める形で働いて

²志波(2013)は、「報道文テキストとは、書き手の意見や評価よりも、実際に起きた(起きる)出来事を事実として伝えることに主眼を置き、普通体で書かれることを特徴とする。」と定義している。(p.124)

いると考えられる。(p.73)

佐藤(2004)は「模様だ」の報告用法について「「話者の認識表明ができない」、「報告の内容の真偽は不確実である」という特徴を合わせ持つ」としている。次の(9)、(10)において、「模様だ」を用いると、〈公的報告の立場〉に立って伝達内容を述べることになる。この意味では、「と見える」に置き換えることはできない。「模様だ」の代わりに「と見える」を用いると、「と見える」が常に話者の判断を表しているため、伝達内容が話者個人の意見であることを表すことになる。

(9) 犯人はすでに逃走した{模様だ／と見える}。

(10) 政府は近々新たな金融緩和策を発表する{模様だ／と見える}。

5. 「かと見える」と「ものと見える」

「と見える」の前に「か」や「もの」が前接した形式も見られるが、「と見える」とは少し意味が違うようである。

(11) トンボの群れは、背のうをしょって行進する兵隊たちの目玉までつきさすかと見えるのに、ザックザックの行進のリズムは、かたときも乱れそうになかった。

(龍の黙示録)

(12) 見れば二十五、六かと見える実直そうな男が立っている。商人体の若者だ。

(八州廻り御用録)

(11)、(12)は、「かと見える」を述語とした例であるが、その意味は、実際はそうであるかどうか分からないが、ただ眼前の様子をそうであると描写していることを表した文であると思われる。不確実さの意味を表す「か」が用いられた点から「と見える」構文よりはモダリティ的働きは弱いと言えよう。

一方、「ようだ」にも「か」が前接した形式の「かのようだ」があるが、「かのようだ」は「かと見える」とは意味が違うと思われる。

(13) この部屋には生々しいワグナーの亡霊が飛翔しているかのようだ。

(ワグナー紀行)

「かのようだ」は「実際はそうでないのに、そうであるかのように振舞ったり、感じたりする様子」を表す。事実と矛盾したり、仮想的なことがらをたとえに挙げて言う場合が多い³とされる。「実際はそうでない」ということを認識しているか否かという点において、

³日本語文型辞典(1998)の記述

「かと見える」と「かのようだ」は意味的に違いがあると考えられる。

次の(14)は、「ものと見える」が用いられている例である。

- (14) 古い碑は、「南無阿弥陀仏」とあって、碑の片側に「文化九壬申年七月建立之」とあるのが読めた。多くの津軽藩兵の病死から数年して、この慰霊碑がたてられたものと見える。 あたらしいほうの碑は、昭和四十八年（一九七三）に建てられた。

（オホーツク街道）

「ものと見える」においては、「もの」が付くことにより、その判断が話者だけの判断ではなく、より一般的な判断であるということを表すようになると考えられる。実際、ネイティブ話者に確認したところ、「ものと見える」より「ものと見られる」に置き換えたほうがより自然という指摘があった。(14)の文において、報道文テキストで使われる「と見られる」が用いられたほうが自然であるということは、文脈上、一般的な判断を表す(特定の人物による判断ではなく、一般的にそのように判断されているという意味)ことが求められているということを意味すると考えられる。このような文脈を持つ(14)に「ものと見える」が使われているということから、「ものと見える」が「と見える」に比べて、より客観的な判断を表す表現であると考えられることができるだろう。

6. おわりに

本発表では、モダリティ表現としての「と見える」構文の意味について考察し、「と見える」構文が、伝達内容(命題内容)が話し手の視覚によって得られた情報を根拠に判断したことであることを表すモダリティ表現であること、そして判断の主体が常に話し手であるため、主観性が強いという特徴を持つことを述べた。

また、話し手の視覚情報に基づく判断を表すと考えられる「と見られる」と「模様だ」との比較を通じてその違いを明らかにした。さらに、「かと見える」、「ものと見える」についても考察し、その特徴を指摘した。

「と見える」は、文体的な特徴として、報道文テキストには用例が少なく、新聞のコラムや小説の地の文・会話文、紀行文などには用例が多数見られる。このような文体的な特徴は「と見える」構文が話し手の判断を表す主観性の強いモダリティ表現であることに起因していると考えられる。

今後、今回の分析結果を踏まえ、「と見える」のモダリティ表現としての成立過程に関して史的な観点から考察を加えたい。

<参考文献>

菊地康人(2000)「「ようだ」と「らしい」―「そうだ」「だろう」との比較も含めて―『国語学』第 51 巻 1 号, pp46-60, 日本語学会

第 9 回国際日本学コンソーシアム「グローバル化と日本学」
日本語学・日本語教育学部会 2014 年 12 月 16 日 於：お茶の水女子大学

- 佐藤琢三(2004)「「模様」の報告用法について」『国語学』第 55 巻 4 号, pp73-84, 日本語学会
- 志波彩子(2013)「「ト見ラレル」の推定性をめぐって - ラシイ、ヨウダ、(シ) ソウダ、ダロウとの比較も含め - 』『日本語文法』13 巻 2 号, 日本語文法学会／くろしお出版
- 砂川有里子(1987)「引用文の構造と機能－引用文の 3 つの類型について－」『文藝言語研究 言語篇』13, 筑波大学文芸・言語学系, pp.73-91
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクストと意味Ⅱ』くろしお出版
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』(増補版) ひつじ書房
- 日本語記述研究会(2003)『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版
- 三宅知宏(1994)「認識的モダリティにおける実証的判断について」『国語国文』第 63 巻第 10 号, 京都大学文学部国語国文学研究室
- 山岡政紀(2003)「可能動詞の語彙と文法的特徴」日本語日本文学 13 号, 創価大学日本語日文学会

<用例出典>

- 『CD－毎日新聞 2000 データ集(毎日新聞社)』
- 『KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス少納言』(オホーツク街道)(水中花)(八州廻り御用録)(龍の黙示録)(ワーグナー紀行)
- 『CD－ROM 版新潮文庫 100 冊』(風立ちぬ)(国盗り物語)(こころ)(弟子)